

横浜市小児科医会ニュース



No.71 令和7年10月1日

時言

「ネット・ゲーム依存について」

横浜市小児科医会常任幹事 後藤 正之
(ごとう小児科アレルギー科)

「時言」という言葉には、「その時に大切であったり、注目すべく言葉」という意味があると思います。そこで、日々の小児科診療の中で実感している「言葉」を取り上げ、それについての思いをつづりたいと思います。

今回、取り上げたい言葉は、「ネット・ゲーム依存」です。最近の外来でも、待合室はおろか、診察中や来院時のバギーカーの中でも、自分や保護者の携帯電話を手にもって、動画を見たり、ゲームをしている幼児を散見します。そして、診察中に自分から携帯電話をしまう児もいれば、保護者から声をかけられ嫌々端末を横によける児や、保護者に端末をねじり取られ、親子喧嘩を始めてしまう児もいます。このような場面が、子供達の生活でも多く見られるのは簡単に想像できます。

長時間の動画視聴やゲームは、様々な悪影響が生じます。まず、眼疾患のリスクが上がります。近いところを長時間注視することで近視が進んだり、内斜視になったり、ドライアイを合併したりします。頭頸部を前方に長時間傾けることからストレートネックとなり、頭痛、頸部や肩の痛みの誘因となります。運動不足から肥満を合併する可能性もありますし、長時間同じ姿勢でいることからエコノミー症候群のリスクもあります。さらに、夜間にも明るい画面を見ていることで、睡眠障害となり、記憶力低下も合併します。長時間のスマートフォン利用は、学業成績が落ちたり、言語発達を遅延させるという論文も発表されています。オンラインゲームなどに夢中になりすぎて、生活や社会活動に悪影響が出ることもあります。例えば、夢中になるあまり学校を休む、夜間にゲームをして昼夜逆転してしまう、それが続いて引きこもってしまう、ゲームへの課金のために高額な費用をつぎ込んでしまう、家族のお金を盗む、クレジットカードを勝手に使う、そして、止めようとする家族への暴言や暴力、物を投げたり壊したり暴れる、などです。こうした「ゲーム依存」は、正式には「ゲーム行動症」と呼ばれるそうです。ゲーム行動症の診

断基準もあり、「自分でゲームをすることをコントロールできない」「生活の他のことよりゲームを優先する」「他に問題が生じているのに、ゲームを継続もしくはさらにエスカレートさせる」という行動が12カ月以上持続すると、診断に近づきます。

一方、子供達の学校教育でも、プログラミングやパソコンを使用した宿題の提出などが増えてきました。生活のなかで、スマートフォンやパソコンといった電子機器を必要とする時間は徐々に長くなっています。こども家庭庁によりますと、令和5年（2023年）の小児におけるスマートフォンの利用率は、小学生が63%、中学生が73%、高校生が98%となっており、小学生でも半分以上となっています。子供達は、ゲーム、動画視聴のみならず、友人や保護者との連絡手段として、LINEなどのソーシャルネットワーキングシステム（SNS）も利用するようになっており、学校のみならず、生活の中でもネットと関わる機会は増えているのです。

治療法は、眼については、眼科学会が発表している「20-20-20の法則」があります。近い画面を20分間見たら、20秒間は、20フィート（6メートル）離れたところを見ると、眼のピントを合わせる毛様体筋を休ませることが出来るというものです。また、スマートフォンなど端末を遠ざけることも大切なようです。例えば、食事の場、勉強部屋や寝室に置かない、などです。端末の設定において、親が機能に制限をかける、他には、ネットやゲーム以外の活動に費やす時間を増やす、親が子と意思疎通を普段から図り長時間使用の弊害などを理解・共有し、ネットやゲームのルールを一緒に決めていくなどのようです。

しかし、「親は子の鏡」とも言います。車中、路上含め、どこでもスマートフォンやパソコンでゲームをしたり、漫画を読んだり、動画を見たりし続けている、そんな大人を見れば、子供達も自然にそうします。子供達に関心を持たれる芸能人が、違法であるオンラインカジノに関わり、活動自粛するニュースもあります。子供達を律する前に、我々大人が、スマートフォンとのかかわり方を反省し、自分でコントロールできるようにするのも大切なことなのかも知れません。

（以上）



最近の話題

(26)

男性が女性の生理を理解すること

横浜市小児科医会常任幹事

藤原 祐

(ふじわら小児科)

先日、NHKスペシャルで「女性の生理」をテーマにした回を観ました。正直、それまでは生理について、知識としては理解しているつもりでも、どこか自分には直接関係のない話だと感じていました。妻の体調変化や生理周期は知っていましたし、結婚14年の間に「生理前は少し機嫌が不安定になる」ことも分かっていました。でも、その裏にある苦しみや負担を、本当の意味で理解できていたかと問われれば…胸を張って「はい」とは言えません。

加えて、妻は婦人科医であり知識も経験もあるから、自分の体調を上手くコントロールできるはずだと、勝手に思い込んでいました。けれど、それは大きな誤解でした。医師であっても、一人の女性として生理に伴う不調から逃れられるわけではなく、むしろ知識がある分、余計に「弱音を吐いてはいけない」というプレッシャーを感じていたのかもしれない。

番組で紹介された衝撃的な事実の一つが、生理の回数の変化です。昔の女性は、妊娠・出産・授乳期間が長く、生涯で経験する生理は50回程度でした。しかし現代では、出産回数の減少と寿命の伸びにより、その回数は約450回にまで増えているのです。つまり、現代女性は歴史上かつてないほど、生理と共に人生を過ごしているということです。

生理は単なる出血ではなく、腹部や腰の激しい痛み、倦怠感、吐き気、頭痛、精神的な不安定さを伴うことがあります。その症状は個人差が大きく、日常生活にほとんど影響のない人もいれば、立ち上がるのも困難なほど苦しむ人もいます。女性同士でさえ、その差は理解しにくく、「ちょっと大げさでは？」と思われてしまうことさえあります。この「見えない差」が、さらに女性を孤立させる原因にもなっているのです。

社会においても、こうした見えない痛みは軽視されがちです。生理休暇の制度があっても使いづらい雰囲気や、周囲の無理解が背景にあります。「我慢できるはず」「気の持ちようだ」という偏見が、女性が安心して働ける環境づくりを妨げています。特に成果主義や長時間労働が当たり前の職場では、体調不良を口にするのが「甘え」や「自己管理不足」と捉えられやすく、女性は二重の負担を背負わされてしまいます。

こうした現状を変える取り組みの一つが、生理痛を疑似体験できる技術です。リンケージ社が開発したVRデバイス「ピリオノイド」は、腹部や腰への電気刺激と映像を組み合わせ、鋭い痛みや鈍い重さをリアルに再現します。体験した男性は、わずか数分で顔を歪め、「これは仕事どころじゃない」と口にします。短時間であっても、その衝撃は強烈で、「これを毎月、何日も耐えているのか」と深い理解と尊敬の念が芽生えるのです。

タレントの千原ジュニアさんも、こうした生理の実態や体験を知り、女性への見方が大きく変わったと語っていました。それまで無意識に抱いていた偏見や先入観は、知識と体験によって初めて崩れるのだと思います。

私自身も、振り返ってみれば「大丈夫？」と声をかけるだけで、どこか安心していただけました。けれど本当は、その一言で妻

の痛みや辛さをすべて分かった気になっていただけなのかもしれません。妻が笑顔で「平気だよ」と答えても、その裏には「迷惑をかけたくない」「弱さを見せたくない」という思いが隠れていた可能性があります。

思えば、自分が学生だった頃の性教育も、女性の身体についての説明はごく簡単なものでした。男性にとって生理は「自分に関係のない話」として通り過ぎてしまう構造が、教育の段階から存在していたように思います。その結果として、大人になっても多くの男性が「知識はあるが体感できない」という壁に突き当たるのではないのでしょうか。本来ならば、男女関係なく学び合い、互いに支え合うための知識であったはずです。

もし私の娘や息子が将来社会に出たとき、すでに生理に対する理解が当然のものとなり、「無理をしなくてもいい」「助けを求めてもいい」と言える環境が整っていたら——それはどれほど安心なことだろうかと考えます。理解を広げることは、単に家庭や職場の快適さを高めるだけでなく、次の世代にとっての「生きやすさ」そのものにつながっていくのです。

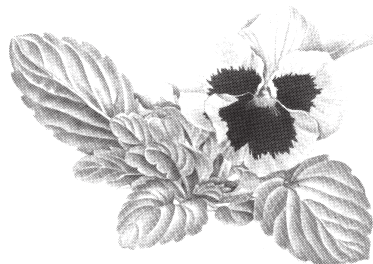
現代女性は、歴史上最も多くの回数、生理を経験しています。それは、仕事や家庭生活

の中で、誰にも気づかれないまま繰り返される戦いです。男性がその現実を知ることは、単なる理解ではなく、日々の行動の変化につながります。夫婦であれば、体調が優れない日には家事や育児を分担する。職場であれば、同僚が無理をしていないか声をかける。長い会議を避ける。そうした小さな配慮が、女性の負担を確実に軽くします。

そして忘れてはならないのは、女性同士の間にも理解が必要だということです。軽い症状の人が、重い症状の人を理解し、支え合う関係があってこそ、本当の意味での共感と連帯が生まれます。

生理の問題は、決して個人の体調だけの話ではありません。働き方、教育、人権、そして社会のあり方そのものに深く結びついています。「見えない痛み」に気づき、想像力を持って行動することは、女性に限らず、すべての人が安心して暮らせる社会をつくる基盤になる——そのことを、今回の番組と体験技術から学びました。

私は450回もの痛みと共に生きる現代の女性たちが、その負担を少しでも軽くし、笑顔で過ごせる社会になることを願っており、まず妻へ生理の時ほど気遣ってあげようと考える今日この頃です。



第7回 神奈川県立こども医療センターとの 院内感染対策地域連携合同カンファレンス 報告

日時 令和7年8月1日(金)
(ハイブリット開催)

講師 横浜市小児科医会 常任幹事 宮地 悠輔 先生
(みやじ小児科クリニック)

1. 新興感染症シミュレーション訓練

神奈川県立こども医療センター (KCMC) 感染制御室 鹿間芳明先生とともに、*クリニックにおける新興感染症の発生を想定した「シミュレーション訓練」を実施しました。今回の訓練は、横浜市南区ゆいこどもクリニック (院長：中島章子先生) にご協力いただき、鹿間先生に実際にクリニックを訪問いただき行いました。

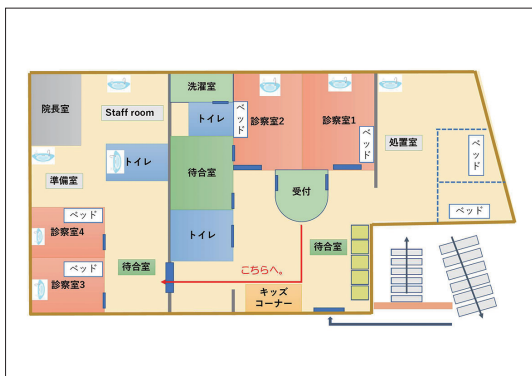
前回のカンファレンス (CR) では、各施設が現実的に実行可能な感染対策や、感染対策マニュアル作成のポイントについてご助言をいただきました。今回は、そのマニュアル整備後の段階として、「麻しん患者を疑う患者が一般外来に来院した場合」をテーマにシミュレーションを行いました。

今回のシミュレーション

- 10か月男児
- 3日前からの発熱と咳嗽、鼻汁、食欲低下
- 保育園の流行は特に聞いていない
- Web問診に上記内容を書き込み、18時の受診を予約
- 母は仕事のため、状況をよく知らない父とともに受診

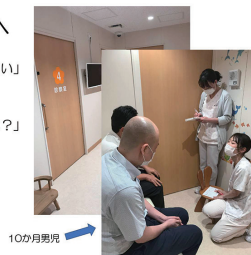
クリニックに入ります

- 『予約していただきませす』
- 「ではまず受付で保険証と診察券、母子手帳の確認を」
- 「ご自宅でお熱は測られましたか？」
- 「出る直前で38.5℃でした」
- 「ではこちらの待合室でお待ちください」



待合室から診察室へ

- 「前の方が終わるまでお待ちください」
- 「4番の診察室へどうぞ」
- 「ご家族や周りの方に体調悪い方は？」
- 「最近海外に行かれたことは？」
- 「定期予防接種はお済みですか？」



「では診察しますね」

- 問診内容を確認して診察開始
- 口腔内、頸部リンパ節、聴診、腹部触診（聴診は顔の上から）
- SpO2測定

ここまでで
何かご質問ありますか？



すみませんおむつ替えてもいいですか？

- そう言って父親が児の服を脱がせると・・・

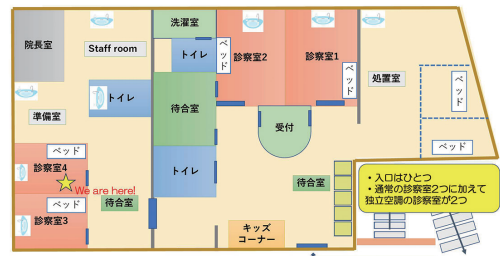
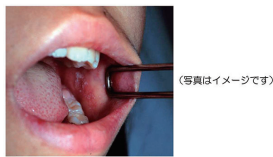


（写真はイメージです）

もしかして？と口の中を見直すと

- 父ひとりごと『朝はこんなブツツななかったけどなあ・・・』

さて皆さん
ここでどう動きますか？



まずは一旦落ち着こう

- 隣の準備室で作戦会議
- 保健所への連絡と検体採取が必要
- 連絡係と処置係に分かれよう
- PPEを装着しよう

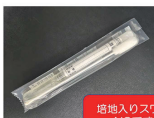


「はしかの疑いがあります」

- 医師から以下の説明
- 「保健所に連絡して検査してもらう必要があります。」
- 「解熱剤を処方しますが薬局には行けないのでここまで持ってきてもらいます。」
- 「正面玄関からではなく裏口からお帰り下さい。」
- 「今日は寄り道せずまっすぐお帰り下さい。」
- 「検査結果が出たらご連絡します。保健所からも連絡が入ります。」

検体採取

- 乳児のため血液・尿は難しい
- 咽頭ぬぐい液のみ採取
- 使用したスワブ



増地入りスワブは
NGです！



ここまでのポイント

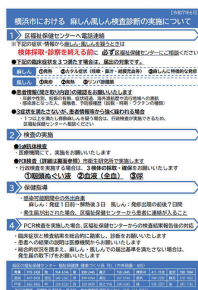
- 普段からの診療体制：予防接種歴や周囲の流行状況の確認、発熱患者の待機場所、感染症疑い患者の診察室
- 麻疹疑いの患者が出たときの対応：保健所への連絡先、採取すべき検体、容器の準備
- PPEの準備：ガウン着脱の手順、廃棄場所

【スタッフからの質問】

- 麻疹患者がいた部屋の換気時間は？
- 同時刻にクリニックにいた他の患者への対応は？
- 麻疹患者はどうやって帰ってもらう？

福祉保健センターへの電話連絡

- ・診察を終える前に連絡
- ・提出する検体は3つ！
咽頭・血液（全血）・尿！
- ・日中・夜間それぞれの連絡先を確認しましょう



検体採取時の注意点

- ・**咽頭ぬぐい液**：採取した綿棒は空の滅菌スビッツに入れる
培地入りスビッツには入れない
- ・**血液**：血清ではなく**全血**
EDTAまたはクエン酸入り容器
血清分離剤入り容器は使わない
- ・**尿**：滅菌スビッツ使用
- ・検体は4℃で保存



麻しんは現在、横浜市内でも散発的に報告されており、今回の訓練は明日にでも実践可能な内容となりました。

他の患者診療を継続しながら感染疑い患者に対応するためには、各クリニックの具体的な動線確保や役割分担を明文化したマニュアルが必要であることを再認識しました。さらに、実際に麻しんと診断された場合には、以下の対応を自院で迅速に実施する必要があります。

- * 同時刻来院患者の接触者対応
待合室等で空気感染対策を講じていなかった患者への追跡・連絡。
- * 当日出勤スタッフの接触者対応
麻しん抗体の有無が不明な場合、必要に応じて出勤停止を講じる可能性あり。
これらの対応は、被害を最小限に抑えるためにも、事前準備と訓練の積み重ねが不可欠です。

参考資料

- ・ 横浜市における麻しん風しん検査診断の実施について（横浜市HP PDF）
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kenko-iryo-fukushi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/doko/todoke.files/sindan.pdf>



2. 抗菌薬処方実績報告（2025年5～6月）

横浜市小児科医会会員 25施設 からの処方データを集計・提示しました。（スライド26～34）

抗菌薬使用状況

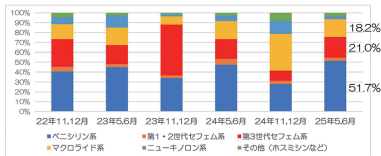
各クリニックの抗菌薬処方率

- 処方率の平均は
1.2%→2.3%→3.1%→3.4%→3.6%と上昇傾向です



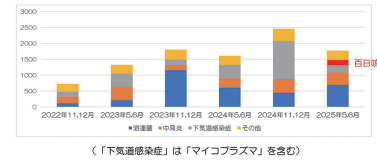
処方抗菌薬の種類

- 前回はマイコプラズマの流行でマクロライド系・ニューキノロン系の割合が増えましたが、今回は元に戻りました。



抗菌薬処方時の病名

- 「その他」は副鼻腔炎、皮膚感染症、尿路感染症など
- 今回は百日咳が増えました：前回0件→今回139件

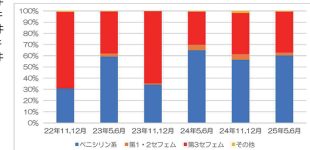


百日咳の検査

- 百日咳の診断で抗菌薬が処方されていたのは139例
- そのうち「LAMP法」で診断と明記されていたのは58例
- 「PCR」（SpotFireと思われる）による診断は5例
- その他は迅速検査（イムノクロマト法）、検査なしで診断
- 一部「培養検査」となっていました・・・
- 百日咳菌の培養は非常に難しいです！
- 外注LAMP法を推奨します（もちろんSpotFireもOK！）

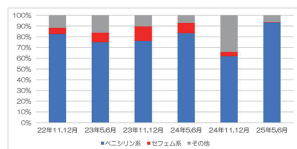
溶連菌感染症の抗菌薬処方

- 抗菌薬処方があったGAS感染症：
 - 22年11,12月 117件
 - 23年5,6月 214件
 - 23年11,12月 1134件
 - 24年5,6月 900件
 - 24年11,12月 450件
 - 25年5,6月 693件



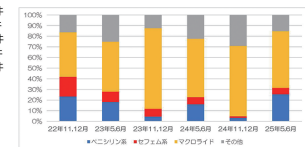
中耳炎の抗菌薬処方

- 抗菌薬処方があった中耳炎：
 - 22年11,12月 189件
 - 23年5,6月 423件
 - 23年11,12月 147件
 - 24年5,6月 283件
 - 24年11,12月 429件
 - 25年5,6月 390件



下気道感染症の抗菌薬処方

- 抗菌薬処方があった下気道感染症：
 - 22年11,12月 141件
 - 23年5,6月 408件
 - 23年11,12月 177件
 - 24年5,6月 418件
 - 24年11,12月 1193件
 - 25年5,6月 235件



抗菌薬適正使用体制加算

【施設基準】

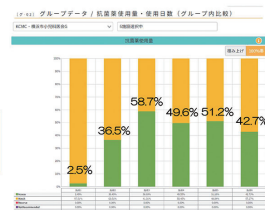
- 抗菌薬の使用状況のモニタリングが可能なサーベイランスに参加していること
- 直近6か月において使用する抗菌薬のうち、Access抗菌薬に分類されるものの使用比率が60%以上またはサーベイランスに参加する医療機関の上位30%以内であること

ここでいう「サーベイランス」は
ほぼ「OASCIS」とイコールです

OASCIS グループデータ

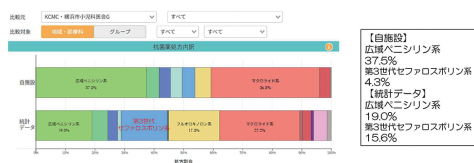
- 横浜市小児科医会グループ
- 現在6施設が参加
- 緑がAccess、黄色がWatch

ちなみに
Access比率が50%程度であれば
『サーベイランスに参加する医療機関の
上位30%以内』
は達成できそうです



OASCIS グループデータ

- 統計データとの比較



OASCIS（診療所版 抗菌薬適正使用推進システム）は、レセプトデータを基に抗菌薬処方状況を自動集計できるツールです。従来の手入力によるエクセル集計に比べ、集計負担を大幅に軽減できるのが特徴です。

- 導入費用・学習コストは不要。
- 利用には登録が必要。
- 会員間でのデータ比較・共有も可能。

お願い：未登録の会員は積極的な利用登録をお願いします。

登録方法が不明な場合は、事務局または宮地までご連絡ください。



横浜市小児科医会会長

岩崎志穂

横浜市小児科医会では2年毎に役員の入替えがあり、今年はその入れ替え年度でした。2年前は私が会長就任直後で、「もうそろそろ辞任したい」とおっしゃるベテランの先生方に懇願して残留の上ご指導頂き随分お世話になりました。今年度は医会のこれからのことを考えて若い先生方数名に役員への就任をお願いしました。

随所で述べていますが横浜市小児科医会は小児科開業医の総意をまとめ医師会を通じ横浜市行政に意見を届ける役目を担っています。医師会・行政に対して意見を通すに資する「小児科医の総意をまとめる」団体とみなされるには多くの開業小児科医の皆様に入会していただき、関心を持っていただく必要があります。今までMRの公費延長や保育園の登園許可証・病児保育の書類の改訂など少しずつ意見が通ってきました。今現在は5歳児健診に関する横浜市主催の会議に会長・副会長が出席し、開業小児科医としての意見を出しているところです（「その他」の項に出した意見を簡単に記載しました）。これからも随時行政に意見を述べることのできる団体として継続して行けるよう、若返りと共に将来を見据えた体制を築いていきたいと思っています。皆様のご協力をお願いいたします。

1. 会議報告

令和7年3月12日令和6年度役員会、4月16日令和7年度第1回常任幹事会、5月14日総会および学術講演会、7月23日第2回常任幹事会が開催されました。

総会では例年通り令和6年度事業・会計、令和7年度事業予定・計画、新役員が承認されました。会計報告の作成過程で赤字の問題が浮き彫りとなりました。支出の見直しとともに会費未納者への対策の必要性が認識され、常任幹事会で会費引き落としへの移行が承認されました。常任幹事会では今後の勉強会などの確認、医会ニュースの執筆者や「みんなの健康ラジオ」の担当などを決定しました。また、地域医会の区割りが現実と即していないところがあり、今後の再編成の必要性が議論されているところです。

2. 勉強会

以下が開催されました。詳細は庶務報告をご覧ください。5月14日令和7年度総会・研修講演会「小児の過眠と睡眠障害の診断と治療」、2)第52回横浜市産婦人科医会・小児科医会研究会（当番：産婦人科医会）「RSウイルス感染症から全ての新生児・乳児を予防するための連携について」、その他メーカーとの共催が数件。

3. これからの予定

1) 令和7年度秋季研修会

（緑区小児科医会と合同）

日時：令和7年9月19日

会場：横浜市医師会会議室+オンライン配信

講師：土岐 篤史 先生（発達臨床研究・研修サポートOffice Reborn）

演題：不登校の理解と医療～子どもたちの心身を守る～

2) 令和7年度横浜市小児科医会研修会

日時：令和7年10月15日

会場：TKPガーデンシティPREMIUM横浜西口6階

講師：稲葉 裕 先生（横浜市立大学整

形外科科学教室 教授)

演題：小児期の歩容異常と下肢アライメント異常～くる病も含めて～

3) 第7回小児科医会・耳鼻科医会合同研修会 (当番：小児科医会)

日時：令和7年11月19日

会場：横浜市医師会会議室+オンライン配信

講師：長谷川久弥 先生 (東京女子医科大学付属足立医療センター新生児科特任教授)

演題：「臨床医家が知っておくべき小児気道病変の診断と治療」

4) 第33回横浜臨床医学会学術集談会

日時：令和7年12月6日

会場：崎陽軒本店6階会議室

講師：宮地 悠輔 先生 (みやじ小児科クリニック 院長)

演題：「感染症サーベランスについて」

5) 「みんなの健康ラジオ」

日時：未定

講師：高橋 亨岳 先生 (港南台こどもクリニック 院長)

演題：小児救急について

4. KCMCとの感染対策地域連携

カンファランスは8月1日に第7回目が開催されました。再度中島幹事(ゆいこどもクリニック)にご協力いただき「クリニック受診者が麻疹だった！あなたならどうする？」のシミュレーションを中心に伝播力の強いウイルス感染への対応を学びました。少し前に藤沢や横浜で複数の麻疹患者が出たこともあり、臨場感のある講義でした。保健所への連絡はすぐできるか？隔離はどうする？同時に受診していた患者さんへの対応は？麻疹疑いの児はどうやって帰宅させるのか？などなど考え、準備しておかなければならない問題

がぎっしり詰まっていました。「麻疹の対応を念頭に置いて感染対策を組み立てておけば新興感染症にも充分対応できる」との鹿間先生の言はさすがです。

クリニックに鹿間先生が出向き一緒に感染対策を考えていただく企画は続きます。感染症のエキスパートに無料で点検をして頂ける良い機会なので皆様も是非対象機関として名乗りを上げて下さい。また、引き続きOASCIS登録をお願いしています。

5. その他

- ・年会費の引き落としを始めます。皆様の手元にはすでに申し込み用紙が届いていると思います。是非とも手続きをお願いいたします。
- ・横浜市主導で5歳児健診に関する会議が数回開かれています。8月現在、まだ個別か集団かの方式も未定ですが、小児科医会からは報酬の少なさ、事後の受け皿の体制の脆弱性、就学後へとつながる体制の不備などを問題点として挙げています。また、個別になった場合には「集団での振る舞いの情報」は必須だとの意見を述べて保育園・幼稚園への問診も作成していただく方向になっています。ご意見がある方は事務局にお知らせいただけると嬉しいです。



区会だより

旭区小児科医会

お盆以降も毎日酷暑が続く今年の夏ですが、こどもの夏風邪も今年はあまり流行っていないように思います。旭区小児科医会では医会としてのトピックスはあまりありませんでした。今年は昨年末のインフルエンザの大流行が収束してからは、小児科の分野では感染症流行の大きな波は無かったような印象です。コロナ以前を鑑みてもこのような年は近年なかったのではないのでしょうか。コロナ禍を経て、生活習慣の変化やこども達の免疫への影響も何かしらあるのかもしれませんが。また酷暑により外遊びが減るなど、こども同士が物理的に接触する時間も少なくなっているのかもしれませんが。気候の変化もそうですが、これからは今の状態がニュースタンダードになっていき、我々小児科医の知る常識が通用しない時代がやってきているような印象です。そのような状況下で小児科医として出来る事や社会的役割を模索していく必要があるかもしれません。

(文責 鈴木 剛)



西部小児科医会

本年度前期の活動報告は特にありません。横浜市立市民病院との症例検討会は、病院の移転、そして本年の小児科スタッフの大幅交替もありましたが、再開できておらず復活に向け進めます。

西部小児科医会は以前の西部小児科懇話会から継続された会ですが、旭区が独立し現在は神奈川区・西区・保土ヶ谷区が対象範囲になるのでしょうか。勉強会も参加者が少なく、医会の枠組みも再考する余地があるかもしれません。

私は前西部小児科医会会長の大西先生から引き継ぎましたが、すでに14年が経過しており世代交代が必要と思います。

なかなか議論する場がありませんが、考慮すべき時期なので、立候補される方がいましたら是非申し出ただければ幸いです。

(文責 尾崎 亮)

青葉区小児科医会

青葉区小児科医会の会員数は令和7年8月1日現在35名です。

小児科医が活発に活動することがその地域の少子化に歯止めがかかるのではないかと思います、できるだけ会員同士のつながりを保つように会を運営しています。

《青葉区小児科医会の主な活動》

1. 学術講演会

3月11日 「乳幼児期の栄養と食事について」

講師：株式会社明治 管理栄養士
林 美沙 先生

参加者：30名

4月23日 「あたまの形外来で得られた
事一開設1年を経ての経験か
ら一」

講師：聖マリアンナ医科大学教授/新
生児科部長 北東 功 先生

参加者：32名

5月15日 「成長曲線は語る 2025」

講師：たなか成長クリニック副院長/
聖マリアンナ医科大学小児科
非常勤講師 曾根田 瞬 先生

参加者：28名

7月1日 「乳幼児の口腔発達の見かた」

講師：げんかい歯科医院 院長
元開富士雄 先生

参加者：35名

2. 第2回青葉区こども病診連携の会

昭和医科大学藤が丘病院小児科と合同勉強会を令和6年度から年に2回開催しています。第2回は5月22日に開催し、症例発表、夜尿症のミニレクチャーを聞き、終了後に懇親会も行いました。参加者は15名でした。

3. ランチミーティング

会員相互で情報を共有する目的で令和6年度から開催しています。日常診療で時に遭遇する見落とし（ピットフォール）症例などについてZOOMを利用して当番会員が10～15分ずつ発表する会です。昼食をとりながら気軽に参加できるスタイルで、3ヶ月に1回程度開催します。前回は6月6日に開催し14名が参加しました。

4. 乳幼児健診（4か月、1歳6ヶ月、3歳）への医師派遣

5. 青葉区休日診療所への協力

6. 小児科医師による市民公開講座

毎年秋に2回、青葉区こども家庭支援課による子育て中の保護者や妊娠中の方を対

象とする講演会に協力して医師を派遣しています。

（文責 齋藤 陽）

中区小児科医会

中区では近年新規開業小児科クリニックはなく、また会員の高年齢化も進んでいます。

乳幼児健診や休日急患診療所への出動枠充足が困難になってきており、地域医療の中での協力体制の維持が喫緊の課題となっています。これを受けて先日7月27日に中区小児科医会会合で出動枠充足に向けた具体策を検討し、みなと赤十字病院小児科からの更なる協力の提案とクリニック会員各々の努力目標を設定する事が出来ました。今後も積極的な意見交換を継続的に行っていきます。

また、横浜市小児科医会幹事会でも意見を挙げさせていただきましたが、今後他区小児科医会との連携も視野に、現状の維持、改善を図っていきます。

今後の中区での学術講演会などは下記の通りです。

①第30回みなと小児疾患研究会

期日：2025年9月30日（火）

19：00～20：15

場所：横浜市立みなと赤十字病院3階大会議室

一般演題：「こどもの咳」専門外来の開設と慢性咳嗽の1例

横浜市立みなと赤十字病院小児科 磯崎淳先生

教育講演：小児科医からみた移行期医療

～リウマチ疾患とアレルギー疾患

千葉大学大学院医学研究院総合医科学 特任准教授

東千葉メディカルセンター小児
科副部長
井上祐三朗 先生

②中区小児科医会定例会（内科医参加）

期日：2025年10月21日（火）

19：00～20：30

場所：中区医療センター 2階

・製剤説明会：株式会社オーファンパシ
フィック

「ラピピュール」乾燥組織培養不活化
狂犬病ワクチン

・中区小児科医会意見交換会：

内科医との協力体制を模索する

（文責 草鹿砥宗隆）

●症例報告（19：30～19：45）

演者：昭和医科大学横浜市北部病院
小児外科 中村 友紀 先生

演題：『乳児精巣上体炎の1例』

●特別講演（19：45～21：00）

演者：昭和医科大学横浜市北部病院
皮膚科 診療科長

渡辺 秀晃（わたなべ ひであき）
教授

演題：『重症型薬疹の最新の知見 —我々
が普段処方する薬で重症型薬疹が
生じる—』

令和7年8月27日 （文責 豊田 彰史）

東部小児科医会

令和7年度前半の主な活動を報告します。

(1) 令和7年7月24日

第133回横浜市東部小児科医会

第19回横浜市東部小児連携の会

会場：済生会横浜市東部病院

症例報告 座長 済生会横浜市東部病院
総合小児科 市川 泰弘 先生

1. トスフロキサシン内服後に急性腎
障害を発症した一例
総合小児科 吉村 英隼 先生
2. 尿管管依存に伴う臍炎で膿瘍形成
に至った一例
総合小児科 中山 知恵 先生
3. 心房粗動に対しカルディオパー
ジョンを施行した新生児例
新生児科 佐久間光志 先生

都筑区小児科医会

このたび、前会長・百々秀心先生の後任として、豊田彰史が会長を務めることとなりました。引き続き、横浜市小児科医会の皆様と連携を深めながら、都筑区の子どものための健やかな成長を支えてまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

さて、都筑区小児科医会では、定期的な勉強会として、年2回、昭和医科大学横浜市北部病院と共催で学術講演会を開催しております。本年はすでに2月に下記の通り実施し、10月にも開催を予定しております。

開催概要（令和7年2月14日実施）

日時：令和7年（2025年）2月14日（金）

19：30～21：00

会場：昭和医科大学横浜市北部病院

西棟4階講堂

4. 乳児期発症の嘔吐を契機に診断を得た先天性食道狭窄性の一例

小児肝臓消化器科

陶山 友徳 先生

済生会東部病院 2025年度新メンバー紹介など横浜市東部小児科医会の症例検討会・講演会は、第132回に引き続き、会場での開催といたしました。

症例報告でもWEB開催以上の活発な討論が交わされ、楽しい会とすることができました。

開催にご協力いただいた済生会横浜市東部病院の地域医療連携室のスタッフの方々に深く感謝をいたします。

今回は、横浜労災病院での開催を予定しております。

(文責 川端 清)

南西部小児科医会

令和7年度上半期は、恒例となっている国立病院横浜医療センターによる講演会を開催しました。

同センターは小児救急拠点病院・周産期母子医療センターとして、我々開業医にとって日々お世話になっている病院です。部長の銚碕竜範先生からは、減少していた紹介患者数がコロナ禍以前をしのぐ程に回復した現状、救急車受入状況等の実績報告がありました。

次に最先端の小児アレルギー治療を行う学会認定専門施設として、ピーナッツ・ナッツ類アレルギーの話題を取り上げていただきました。ナッツ類のアレルギー有症率は鶏卵に迫り第2位と増えていることから、各種ナッツアレルギーの疫学・診断・治療・問題点を説明していただきました。

他、症例報告として貴重な2例と尿路感染症の現状を解説していただきました。

第56回横浜市南西部小児疾患研究会

日時：令和7年7月17日（木）午後7時

会場：国立横浜医療センター大会議室 C

演題『令和6年度小児科の診療実績報告』

銚碕 竜範 先生

演題『ピーナッツ・ナッツ類アレルギー

up to date』窪田 祥平 先生

症例報告

1. 重症バセドウ病の母体から出生した新生児の1例
2. 亜急性壊死性リンパ節炎（菊池病）の1例
3. 直近4年間の上部尿路感染症のまとめ南西部小児科医会では、国立横浜医療センター小児科の先生方のお力添えをいただき、年2回程講演会を共催しています。是非とも開業の先生方のご参加をお待ちしております。

(文責 小泉友喜彦)

南部小児科医会

会員数：45名

横浜市南部小児科医会の令和7年度上半期の事業内容をご報告いたします。

●定例幹事会

日時：4月10日（水）19：00～21：00

於 福ろく寿（上大岡）

●令和6年度定例総会、講演会

日時：6月11日（水）19：00～20：30

於 済生会横浜市南部病院4F会議室

共催：港南区医師会

定例総会 事業報告・会計報告・会計監
査報告その他

講演 「精神科医が小児科医にお願いされ
ること・お願いしたいこと」

神奈川県立こども医療センター児童
思春期精神科 豊原 公司 先生

●第43回南部病院小児科地域連携集談会

日時：7月2日（水）19：00～20：45

於 濟生会横浜市南部病院 4F会議室

共催：濟生会横浜市南部病院，

Meiji Seika ファルマ株式会社

1. 「基調講演」

①「百日咳 ～現在の流行状況と課題に
ついて～」

上大岡こどもクリニック

佐藤 和人 先生

②「当院での百日咳検出状況～地域流行
下での百日咳診療と検査・治療の実際
～」

みやじ小児科クリニック

宮地 悠輔 先生

2. 「症例発表～発熱症例を中心に～」

〔座長〕 濟生会横浜市南部病院

小児科部長 鈴木 徹臣 先生

①「外陰部潰瘍から診断されたベー
チェット病の一例」

尾留川詩織 先生

②「間擦部に点状出血を認めたパルボウ
イルス感染症例」 小俣 志織 先生

③「2025年春の川崎病」

江並龍之介 先生

（文責 佐藤 和人）

緑区小児科医会

今年度の小児科医会の活動として講演会を
行いました。講演会は令和7年1月31日に緑
区医師会館3階会議室で横浜市北部地域療育
センター 発達精神科 士岐 篤史先生に
「外来で診療する発達障害（幼児編）」とい
う演題で講演をお願いしました。参加者：17名
（会場参加13名，WEB参加4名）でした。活
発な質疑応答があり，改めていつも行ってい
る健診を見直す良い機会となりました。同じ
1健診でも児童精神科と小児科では違うんだ
と勉強させられました。また，要保護児童対
策地域協議会を7月2日に緑区役所で行いま
した。虐待児やその家族への対応につき各職
種担当の方々から様々な意見がだされまし
た。様々な職種のきめ細やかな対応に感心さ
せられました。その中でも，新しく小学校，
中学校が不登校の児への対応として自由クラ
スを設立していることに感銘を受けました。
実際鴨居にある小学校ではかなり功を奏して
いるので，専任の先生を確保しているとの事
でした。今後様々な取り組みが構築されてい
くとは思いますが，小児科医としてその一助
になればと考えております。

（文責 山田 俊彦）



＝＝＝ 庶 務 報 告 ＝＝＝

1. 令和7年度総会・研修講演会

R7.5.14 (水) web併用

会 場：AP 横浜

出席者：78名 (Web57名)

(1) 総 会

1. 会長挨拶

2. 議長選出

3. 議事

1) 令和6年度事業報告

2) 令和6年度決算報告

3) 令和7年度事業計画 (案)

4) 令和7年度予算 (案)

5) 令和7・8年度役員について

6) その他

(2) 研 修 会

講演 小児の過眠と睡眠障害の診断と治療

講師 白濱龍太郎 先生

((医) RESM RESM (リズム) 新横浜/睡眠・呼吸メディカルケアクリニック)

2. 常任幹事会

第1回 R7.4.16 (水)

於 横浜市医師会会議室

出席者：18名 (Web8名)

第2回 R7.7.23 (水)

於 横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズ

出席者：17名

3. 第52回横浜市産婦人科医会・小児科医会研究会

R7.6.6 (金) web併用

会場：横浜市医師会 会議室

出席者：86名 (Web75名)

講演 RSウイルス感染症から全ての新生児・乳児を予防するための連携について

講師 倉澤健太郎 先生 (横浜市立市民病院 産婦人科 科長・部長/母子医療センター長)

4. 広報活動

R7.4.1 (火)

小児科医会ニュース (第71号) の発行

5. その他

* Atopic dermatitis Webinar

小児アレルギーとアトピー性皮膚炎治療について考える

R7.7.2 (金) web併用

会場：大塚製薬株式会社首都圏第二支店

出席者：34名 (Web27名)

講演：エビデンスに基づいた小児アトピー性皮膚炎の外用治療の極意

講師：只木 弘美 先生

(横浜医療センター 小児科 部長)

パネルディスカッション：アレルギーマーチについて考える

～湿疹の向こう側を見据えて～

演者①：窪田 祥平 先生

(横浜医療センター 小児科)

演者②：小張 真吾 先生 (横浜市立みなと赤十字病院 アレルギー小児科 副部長)

演者③：山川 有子 先生

(山川皮ふ科院長)

* 第7回KCMCとの感染対策地域連携合同カ
ンファレンス

R7. 8. 1 (金) web併用

会場：横浜市医師会会議室

出席者：42名 (Web34名)

内容：①新興感染症等の発生を想定した訓練
②小児科定点感染症報告まとめ
③各診療所における抗菌薬の使用状況
の報告

講師：鹿間 芳明 先生

(神奈川県立こども医療センター感染制
御室長, 検査科, 感染免疫科医長兼務)

(文責 中野 康伸)

==== 会計報告 ====

横浜市小児科医会会計の中間報告を申し上げます。

中間報告 R07. 09. 30現在


現在高	3,273,279円
(内訳) 現金	0円
郵便貯金	434,758円
医師信用組合	2,838,521円

(会計 川口 葉子)



会員動向 (令和7年4月～令和7年9月)

入会 4名

銚 碯 竜 範 〒245-8575 戸塚区原宿3-60-2 国立病院機構横浜医療センター TEL 045-851-2621	
豊 田 彰 史 〒224-0053 都筑区池辺町4035-1 ららぽーと横浜 1F (医)千歳会 キッズクリニック 鴨居 TEL 045-929-0085 コメント 都筑区で小児科クリニック院長となり 8年目、都筑区小児科医会会長を務め ております。横浜市小児科医会の皆さ まとつながりを大切に、地域の子ど もたちの健やかな成長を支えてまいり ます。どうぞよろしく願いいたします。	
齋 藤 萌 〒223-0051 港北区箕輪町2-15-22 (医)あべこどもクリニック TEL 045-566-2112	
元 田 玲 奈 〒232-0007 南区清水ヶ丘49番地 横浜市中部地域療育センター TEL 045-253-0358	

退会 4名

区 名	氏 名	備 考
青 葉 区	有 本 泰 造	
保土ヶ谷区	門 脇 淳 子	
保土ヶ谷区	宮 川 政 昭	
瀬 谷 区	今 井 満	

異動：0名

会員数：221名 (令和7年9月30日現在)

編集後記

今号から編集後記を担当いたします、佐藤和人と申します。まずは、本号へご寄稿くださいました先生方に心より御礼申し上げます。

岩崎会長も医会通信で触れられているように、横浜市と5歳児健診に関する会議が行われており、私も会長とともに出席しております。問題点などは会長のご指摘の通りですのでここでは割愛いたしますが、個人的には「発達障害をしっかりと診ることができるようになるチャンス」とも受け止めています。一朝一夕に解決するものではありませんが、知識習得の面でも横浜市から協力を得られるよう、働きかけていきたいと考えております。

(広報担当副会長 佐藤 和人)

2025年10月1日発行

横浜市小児科医会ニュース No. 71

題字 五十嵐鐵馬

発行人 横浜市小児科医会

代表 岩崎 志穂

編集：横浜市小児科医会広報部

事務局：〒231-0062

横浜市中区桜木町1-1

横浜市医師会 地域医療課

Tel 201-7363